



おすすすめの一冊

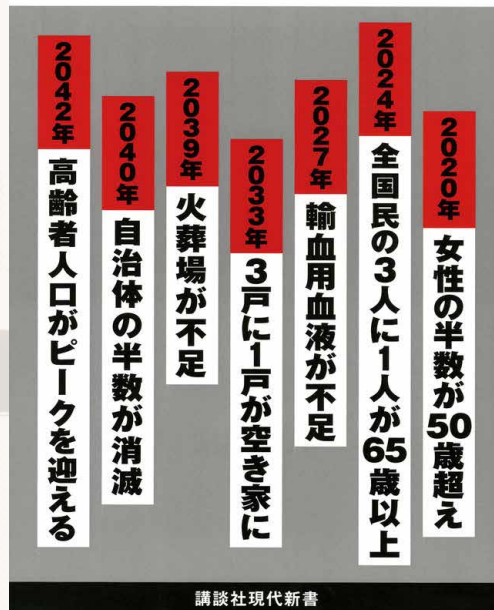
河合雅司『未来の年表 人口減少日本でこれから起きること』

日 本は急速な少子高齢化の進行により生産年齢人口が減少しており、社会の活力の維持が困難になりつつあります。さらに2020年以降の新型コロナウイルス感染症のパンデミックがこれに拍車をかけています。

本書では筆者が少子高齢化を「静かなる有事」と名づけ、その進行とともに日本の社会が今後どのようなようになっていくのかを、データに基づいて時系列に予測しています。例えば2025年には東京都の人口が減少しはじめ、2026年には認知症患者が700万人を超え、2027年には献血者不足で輸血用血液が不足し、2033年には全国の住宅の3分の1が空き家になり、2040年には東京都民の3人に1人が高齢者になり、さらに西暦3000年には日本人は2000人になり、「絶滅危惧種」になってしまうとまで述べています。

未来の年表

人口減少日本でこれから起きること
河合雅司



未来の年表
人口減少日本でこれから起きること
河合雅司 著
講談社

に気持ちも沈んでしまっていますが、しかし、筆者は本書の最後に次世代のために今取り組むべきことを「日本を救う処方箋」と題して、少子高齢化を前提とした10の対策を提案しています。東京一極集中の解消、コンビニエンスストアなどに見られる24時間社会からの

脱却、コンパクトな街づくり、人材育成、少子化対策などです。社会が縮んでいくことはやむを得ないものの、「戦略的」に縮みながら社会の活力を保つことを提唱し、その中で「高齢者の削減」という対策をあげています。「高齢者の削減」というと

ギョツとしますが、その意味するところは高齢者も60歳代で引退するのではなく、70歳を超えても健康を維持し、可能な限り社会参加をして、できれば社会を支える側に回るということです。各個人が高齢者になる前から自らの健康状態を把握し、適切な食事や運動などによる健康管理により、可能な限り自ら動けるからだや認知機能を維持することが望まれます。他方、一貫して減少している子どもたちが健やかに成長して、将来の社会の担い手となることも劣らず重要です。

本書は日本の衝撃的な未来像を描きつつも、しっかりとそれを受け止め、今対応を始めることで持続可能な社会を構築できる可能性を示唆しています。国民の健康を支える立場の職種の方々の果たす役割は、少子高齢化社会の中ですますます重要になっていくと思われまします。ぜひ本書をご一読いただければと思います。

松本 守雄

まつもと もりお

慶應義塾大学病院病院長、整形外科教授。専門は脊椎外科。特に側弯症の診療に長年携わる。日本側弯症学会理事長、日本整形外科学会理事長を歴任し、運動器疾患の予防と治療の発展をめざして活動した。